

2021年6月20日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

イザヤ書 25：6～10

ルカによる福音書 14：15～24

「宴会への招き」

<安息日の食事の席で>

今日の所は、14章1節から24節まで続いている、安息日にイエスさまがファリサイ派の議員の家で食事をしている場面の、最後の部分です。

これまでのところでイエスさまは、神さまがどのような者を救おうとしておられるか。神さまの救いに与るとはどういうことか、ということ、この食事の席で教えてくれました。

イエスさまは、神さまの救いへの招きを、婚宴や食事の席への招きにたとえられました。

そして、前回のところでポイントだったのは、11節の「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」というイエスさまの御言葉です。

そこで「高ぶる者」というのは、自分が食事招かれて当然だと思っている人。良い席に着くのが当然だと思っている人。また、招かれたら、自分にはお返しをする力があり、招いてくれた人と対等の関係を築ける、と思っている人のことです。

救いにおいて言えば、自分が何か救われるだけの善い行いや、資格や、立派さを持っている人。自分は救われて当然だと思ったり、あるいは、自分の力や努力によって、救いを得ることが出来る。救われるために、神さまに差し出せるものが自分にはある、と思っている人のことです。

一方で、へりくだる人とは、謙遜する人や遠慮深い人という意味ではなく、招かれても、お返しも何もできない人。招かれるような肩書も、立派さも、富も、何も持っていなくて、無力で、弱くて、誰にも目を留められないような人のことです。

それは、救いにおいていえば、ただただ、罪に捕らえられて、動けなくなっている人。そこから自分で立ち上がることが出来ずに、打ち砕かれて、ただただ救いを待ち望んでいる人。神さまに助けを求めるしかないような人。それが、へりくだる人です。

イエスさまは、安息日に食事招かれた客たちに、あなたたちは神さまの御前で、自分がどのような者かを知りなさいと言われたのです。

一緒に食事についていたのは、ファリサイ派や律法学者と呼ばれる人々。選ばれた神の民イスラエルの一員で、その中でもエリートの人々です。あなたたちは、自分が招かれて当然だと思っていないか。神さまに救われて当然であり、また自分にはそれにふさわしいものがあると思っていないか。そう問われたのです。

彼らも、そしてわたしたちも、神さまの御前では、何も持っていません。ただ、罪に捕らわれ、そこで救いの御手を待つばかりの者なのです。わたしたちは、自分が、誰も高ぶることなど出来ない、低いところにいる者であることを、知らなければなりません。

また、イエスさまは、食事の席に招いてくれた人には、そのようなお返しのできないような人をこそ、食事に招きなさい。そうすれば、正しい者たちが復活するとき、つまり、終わりの日、神さまの救いが完成する日に、報われるだろう。神さまが喜んで下さるだろう。そう語られたのです。

それは、他でもない、神さまこそが、そのような無力な者、救われるために何も差し出すことの出来ない、ただただ罪に打ち砕かれた、へりくだる人をこそ、救いへと招いて下さり、恵みに与らせて下さるようなお方だからです。

<神の国の食事>

今回の聖書箇所は、この教えの続きなのです。15節には、このようにあります。

「食事を共にしていた客の一人は、これを聞いてイエスに、『神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう』と言った。」

これを聞いて、というのは、その直前の14節後半のイエスさまの御言葉、「正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる。」終わりの日に、へりくだった人を招いたことに、神さまが報いて下さる、ということを知って、こう言ったのです。

この人は、ただ何の気なしに、「ああ、神さまに報われる人は幸せですね。終わりの日に、救われた者があずかる神の国の食事は、本当に素晴らしいでしょうね。」と、さらりと感想を述べたにすぎなかったかも知れません。

でも、イエスさまはこれに対して、またたとえを語られました。イエスさまは、「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」と、あなたはまるで人ごとのように言っているが、あなた自身はどうなのか。あなたは神の国の食事に招かれていると思っているのか。招かれているなら、その招きを真剣に受け止めて、応えているのか。

そのことを問われたのです。

<盛大な宴会>

さて、イエスさまが語られた「たとえ」はこうです。まず、「ある人が盛大な宴会を催そうとして、大勢の人を招いた」とあります。イエスさまは、神の国の食事を、盛大な宴会にたとえられました。

さて、この宴会の主人は、大勢の人を招き、そして「宴会の時刻になったので、僕を送り、招いておいた人々に、『もう用意ができましたから、おいでください』と言わせた。」とあります。当時、大きな宴会を催す時には、最初に客を招待しておき、当日用意が出来たら、僕を遣わしてもう一度招くという、二度にわたる丁寧な招待をすることになっていたようです。

[断る人々・高ぶる者]

ところが、僕が招待された客に、「もう用意ができましたから、おいでください」と、二度目の招きを伝えに行くと、「皆次々に断った」というのです。

ある人は、畑を買ったので、見に行かなければならない。またある人は、牛を買ったので、それを調べに行かなくてはならない。またある人は、結婚したので、行くことができません、と。皆、最初の招待を受けた時に、行きます、と返事をしたはずなのに、いざとなると、そんな風に理由を述べて、皆ドタキャンをしたというのです。

それぞれの理由は、もっともらしいものかも知れません。でも、彼らは、前もって約束し、この日すでに用意されていた主人の宴会と、今日の自分の都合を天秤にかけて、自分の都合の方を優先したのです。

それは、主人に対してとっても失礼な話です。彼らは断られた主人がどう思うかなど、何も考えていないのではないのでしょうか。

一方主人は、一人一人を招待して、心を尽くして、宴会の準備をしていたのです。皆が来たら、食事を楽しみ、喜び、満足してくれることを期待して、主人自身がこの日を楽しみに待っていたに違いありません。そのため時間をかけて、十分に備えてきた。それなのに、皆あっさりと宴会を断って来た。聞けば、今日でなくても良いような予定です。どれだけ悲しかったことでしょうか。また、どれだけ腹が立ったことでしょうか。

21 節には、「僕は帰って、このことを主人に報告した。すると、家の主人は怒って、僕に言った。」とあります。主人は怒ったのです。当然です。彼らは主人を蔑ろにし、軽んじたのですから。

この断った人々こそ、前回でいう「高ぶる者」です。招きを受けた者も、自分は招かれて当然だと思っているところがある。招かれる資格もあれば、それを断る権利もある。そう思っているのです。主人の招きよりも、自分の都合、自分の思いを優先して良いと思っているのです。

これは、ここではまさに、神の民イスラエルの人々、また、その中のエリートである、ファリサイ派や律法学者たちを指しているのかも知れません。

彼らは、神さまがすべての民に祝福を与えるために、確かに最初に選ばれた、神の民です。しかし、彼らはいつしか、自分は救われる資格を持つ者だと思っている。神の民であること、律法を正しく守っていることが、自分が救われる理由だ。救われる要件を、自分は満たしているのだ。そう思っていたのではないのでしょうか。

しかし、人間の中で誰一人、「救われる資格」を持つ者などいないのです。人は皆、罪に捕らわれているのであり、誰も、何も持っていないのです。ただ、神さまに救われるしかない。ただ、神さまの憐れみによって、助けていただくしかないのです。

[お返しができない人たち]

さて、怒った主人は僕に言いました。『急いで町の広場や路地へ出て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい。』

次に主人が、僕を遣わして招かせたのは、町の広場や路地にいる、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人でした。

これは前回の13節に出て来た、食事に招かれてもお返しができない人たちです。つまり、へりくだる者、低くされた者たちです。

当時、このような人たちは、罪のためにそのような境遇に置かれているのだと考えられていました。要するに、神さまの祝福から落ちてしまった人たち。何らかの罪を犯して、その報いを受けている人たちと思われていたのです。

ですから、このような人々は、宴会とは全く無縁でした。食事を共にするということは、親しい交わりを持つということであり、同じ食卓に着くことは、仲間であることのしるしです。ですから誰も、このような人々を招こうとはしないのです。

しかし、主人はこのような人たちを連れて来るようにと言われました。

前回の箇所に出て来た、お返しのできない人たちを招きなさい、とのイエスさまの教えがありました。ここでまさに、神さまこそ、そのような者たちを招かれるお方なのだ、ということが明らかにされているのです。

このような人たちが宴会の席に着けるのは、律法を正しく守るからでも、立派な身分があるからでも、素晴らしい功績があるからでもない、ということは明らかです。

彼らは、何も出来ない人々。何の資格もない人々。むしろ、罪人であると人から思われ、自分でもそのように思っていた人々です。

そんな彼らが宴会の席につける理由は、ただ一つ。それは、「主人が招いたから」です。それ以外に、宴会に来ることが出来る理由は何もありません。

そして、22節では、やがて僕が「御主人様、仰せのとおりにいたしました」と言った、とありますから、これらの、お返しのできない人々は僕の招きを聞いて、ただ驚いて、喜んで、その招待を素直に受け、宴会の席に着いたに違いありません。

しかし、それでもまだ席が残っている。どれだけの席が用意されていたのでしょうか。とにかく、大勢を招きたい。家をいっぱいになりたい。それが、主人の願いです。それでこの主人は、「通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ。」と言うのです。

通りや小道というのは、町の境界線や、あるいは町の外を指すようです。つまり、神さまの救いへの招きに、範囲や境界線はないのです。神さまは、すべての者を招こうとしておられます。どんな罪人でも、どんな小さな者でも、どんな無力な者でも、一人でも多くの者に、わたしの宴会の席に着いて欲しい。わたしの救いの恵みに与って欲しい。わたしと親しく交

わって欲しい。そう願っておられるのです。

「無理にでも人々を連れてきて」と言うほどに、神さまは、熱心に、真剣に、必死に、一人でも多くの者を、ご自分の食事に、救いの恵みに、招こうとしておられるのです。

<わたしたち>

だから、イエスさまは問うておられるのではないのでしょうか。

あなたも招かれているのだ。あなたも、罪に捕らわれ、何もできず、何も持たず、ただ外で座り込んでいる者であったのに、神さまはあなたに目を留め、ご自分の盛大な宴会の席に招待しておられる。救いの恵みへと、招いておられる。

それなのに、あなたは、それを後回しにしていないか。自分は招かれて当然とっていないか。応えるのは後からでも大丈夫とっていないか。今は自分の予定を大事にしたいので、失礼させて下さいと、神さまの救いの御手を払いのけてはいないか。

…わたしたちは、本当は、そんな余裕は誰にもありません。神さまに造られたわたしたちは、神さまから離れては、ただ滅びへと転がり落ちていくだけなのです。わたしたちは皆、罪に捕らわれて、滅びの瀬戸際に、冷たい井戸の底に立っているのです。わたしたちは、自分で自分を救えません。何も持っていません。何も出来ません。

だから、神さまはわたしたちを一刻も早く、そこから引き上げてやりたいと思って下さっている。救いの御手を伸ばして下さい、わたしたちがその神さまの御手を頼り、救われることを、願って下さっているのです。

そして今、その招きがある。その憐れみが、その助けが、その救いが、すでに用意されていて、あとはあなたが来るだけだ、あなたがそれを受け取るだけだ、と言われているのです。わたしたちは、それを真剣に、必死に、自分の命に関わることとして、受け取ろうとしているのでしょうか。わたしたちには、この招きしか、ないのです。

<一人の僕>

そして、もう一つ注目したいのは、主人に遣わされた僕のことです。

大勢の人が招かれていて、その一人一人に「もう用意ができましたから、おいでください」と告げに行く僕。普通は、何人もの僕を一斉にそれぞれの客に遣わすに違いありません。

しかし、このたとえの中で、もとのギリシア語では、常に一人の「その僕」となっているのです。ずっと、同じ一人の僕が遣わされているのです。

この僕は、まさに、神さまに遣わされた唯一の救い主、イエスさまのことです。

イエスさまは、主人の宴会への招き、神さまの救いへの招きを、わたしたちに告げるために、この世に遣わされたお方です。その招きは、近くにいる人にも、広場や路地にいる人にも、町の外にいる人にも、どこにいる人にも届けられます。イエスさまが、その招きを受けべき一人一人のところまで、どんなに遠くても来て下さるのです。

どんなに罪の深みにはまっても、どんなに悲惨の中にも、どんなに苦しみのどん

底にいても、どんな絶望の果てにいても。どれだけ低くても、どれだけ神さまから遠く離れても、神さまに遣わされたイエスさまは、救いの招きを届けに来て下さるのです。

そして、わたしたちがその招きに応えることが出来るように。神の国の食事の席に着かせていただくことが出来るように。わたしたちが押しつぶされている罪の重荷を代わりに背負い、受けるべき滅びを代わりに担い、神さまの御許へ行く道を、神の国へ至る道を、十字架と復活の御業によって、拓いて下さったのです。

神さまの救いへの招きは、わたしたちの命がかかっており、またそのゆえに、神の御子イエスさまが、命をかけて下さったのです。

わたしたちが、ただ受け取ることしか出来ない救いは、神さまのそれほどの愛と、憐れみと、熱心さ、真剣さによって与えられる、救いなのです。

これに対して、わたしたちが何を差し出せるというのでしょうか。何の資格があるというのでしょうか。

しかし、神さまは、わたしたちが、これをただ受け取ることを、良しとして下さるのです。そのことをこそ、望んで下さり、また喜びとして下さるのです。

わたしたちは、ただ驚きをもって、感謝を持って、悔い改めを持って、この救いを受け取るだけなのです。

ですから、わたしたちは、この神さまの招きを、今すぐ、真剣に受け止めなければなりません。自分の都合や、思いや、考えによって、神さまの御心を後回しにしてはいけません。イエスさまの命をかけて与えられた招きを、わたしたちの命がかかった招きを、わたしたちもまた、真剣に、そして素直に、受け止めたいのです。

<イエスさまの食事>

そうして、わたしたちは救いへの招きにお応えする時、教会で洗礼を受けるのです。

洗礼は、イエスさまの十字架の死による罪の贖いと、復活の永遠の命に与る「しるし」です。イエスさまと一つに結ばれ、自分が神さまのものとされる「しるし」です。

ところが、そうして救いへのお招きに応えた後もなお、わたしたちは、自分の思いを優先してしまったり、神さまの御手に頼るのをためらったり、誘惑に負けそうになったりして、罪深い歩みを繰り返してしまうのです。しかし、イエスさまは、そのような弱いわたしたちのために、聖餐の食卓を備えて下さいました。

聖餐は、パンと杯を通して、イエスさまの十字架によって裂かれた肉と、流された血を覚え、それによって救いの恵みに与る「しるし」です。そして、それと共に、今日語られて来た、終わりの日の、神の国の食事の「先取り」でもあるのです。

神の国の宴会が盛大に開かれるのは、終わりの日です。わたしたちは、その日を待たなければなりません。それまでに、わたしたちには多くの試練や誘惑があるでしょう。また、その日が来る前に、肉体による地上の歩みを終えるかも知れません。わたしたちの心は萎えやすく、弱りやすく、歩みはとても頼りないものです。

しかし、だからこそ、わたしたちには聖餐の恵みが与えられたのです。わたしたちは、聖餐に与ることによって、イエスさまの救いの恵みを繰り返し確かにされます。

また、この地上の聖餐の食卓を通して、わたしたちは、終わりの日の神の国の食卓を垣間見ているのです。わたしたちが、確かに神の国の祝宴に連なっていることを、この世にあって、聖餐において、確かに示されるのです。

教会によっては、聖餐の時に、この僕の「もう用意ができましたから、おいでください」との招きの言葉を語るところがあるそうです。

「もう用意ができましたから、おいでください」。あなたの席が用意されています。あなたを主人が待っておられます。あとは、あなたが来るだけなのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたは、わたしたちを神の国の食事に招いて下さいます。わたしたちは、そのためのふさわしさも、お返しするものも、喜ばれるものも、何も持っていない者です。

それでも神さまは、わたしたちを親しい交わりへと招いて下さり、救いの恵みへと招いて下さり、わたしたちがそれにお応えして、あなたとの交わりに生きる者となることを、心から望み、また、それを心から喜んで下さるお方です。

その神さまの御心を、わたしたちが真剣に受け止め、お応えする者となることが出来ますように。自分の都合や、思いによって、あなたの御心を後回しにすることがありませんように。あなたの熱心や、真剣さ、わたしたちに注いで下さる深い愛や、憐れみを、無下にすることがありませんように。

イエスさまが、ご自分の十字架の死と復活の命によって与えて下さった、救いへの招きを、ただ感謝して、素直に受け取る者として下さい。

このお祈りを、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン